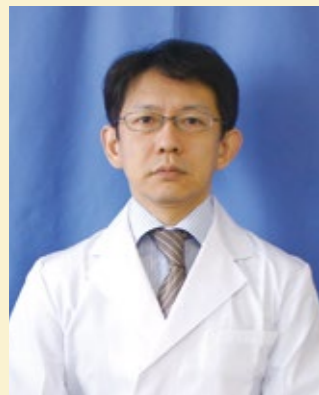


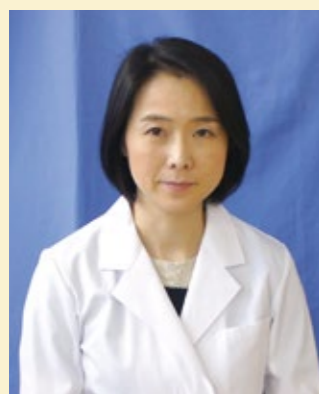
新任部長紹介

脳神経外科部長
とだ ひろき
戸田 弘紀



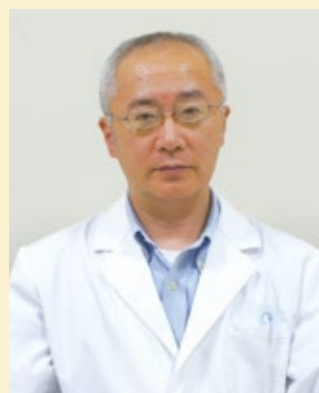
卒業年次／平成5年
資格／日本脳神経外科学会専門医
日本脳卒中学会認定医
日本脊髄外科学会専門医
日本がん治療認定医機構
がん治療認定医
専門／脳卒中(脳動脈瘤 くも膜下
出血 脳出血 脳動脈奇形)、脳腫
瘍(神経膠腫 転移性脳腫瘍 髄膜
腫 聴神経腫瘍 下垂体腺腫 ほか)、
脊椎・脊髄疾患(変形性頸椎症・腰
椎症 頸部・腰部脊柱管狭窄症 頸
椎・腰椎椎間板ヘルニア 脊髄腫瘍
など)、三叉神経痛、顔面けいれん、
パーキンソン病、ふるえ(本能的振
戦 ジストニア(斜頸 書痙を含む)脳
深部刺激療法)

形成外科部長
やまわき さとこ
山脇 聖子



卒業年次／平成6年
資格／日本形成外科学会専門医
日本形成外科学会皮膚腫
瘍外科指導専門医
日本創傷外科学会専門医
日本がん治療認定医機構
がん治療認定医
専門／ケロイド、瘢痕、再建外科

救急部長
しまだ よしみつ
嶋田 喜充



卒業年次／昭和62年
資格／日本内科学会認定内科医
日本内科学会総合内科
専門医
日本内科学会JMECC
インストラクター
日本救急医学会救急科
専門医
日本救急医学会ICLS
ディレクター
日本プライマリケア学会認定医
日本DMAT隊員
専門／ER型救急

開催報告

地域医療連携交流会

2月19日(金)、平成27年度第2回交流会を開催しました。当院坂本放射線科副部長による「Vero4DRTと最新高精度放射線治療」、柴田医院柴田恒夫先生に座長をお務めいただき、川上外科部長による「腹腔鏡・内視鏡合同手術(LECS)の経験」について、話題提供させていただきました。当日は院内外67名の先生方にご出席いただきました。今年度も、引き続き話題提供をまいりますので、是非ご出席くださいますようお願いいたします。



地域医療連携課 新メンバーの紹介

4月より参事1名、社会福祉士2名を地域医療連携課に追加し人員体制を強化いたしました。先生方のご要望を伺いながら、よりよい連携に努めてまいります。ご指導の程よろしくお願いいたします。



<新メンバー>
副院長(地域医療連携担当) 小松和人(左から3番目)
参事(地域医療連携担当) 青柳芳重(左から1番目)
地域医療連携係長 森岡恵代(右から3番目)
地域医療連携課 主事 坂田智子(右から4番目)
主事 山本菜未／がん診療センター(右から2番目)
社会福祉士 奈須田瞳(左から2番目)
社会福祉士 古館美穂(右から1番目)

地域医療連携課

受付時間／平日 8:00~18:30
土曜 8:30~12:30
TEL 0776-36-4110(直通)
FAX 0776-36-0240(専用)

 福井赤十字病院

http://www.fukui-med.jrc.or.jp
e-mail renkei@fukui-med.jrc.or.jp

連携通信第58号発行
平成28年4月
福井赤十字病院



Partner

Japanese Red Cross Fukui Hospital

福井赤十字病院連携通信

パートナー vol.058

平成28年4月発行



入院患者さんの作品

Topics トピックス

本館改修の完了のお知らせ

現在の本館は竣工後10年が経過し、より質の高い医療を提供するため、内科系医師と外科系医師が密接に協働できる体制として「センター化構想」の実現に向け取り組んでまいりました。「呼吸器センター」、「腎センター」は、ハード面の整備が既に完了し稼働しておりましたが、さらに追加して「脳神経センター」と「消化器センター」のハード面についての改修も完了し、より緊密な診療が行える体制といたしました。

さらに、医療ニーズの変化に対応するため、一般内科を総合診療科に改め、整形外科、皮膚科、歯科、耳鼻咽喉科については診察室を増設するなど診療機能を強化するとともに、女性外来(産婦人科と乳腺外科)については待合にパーテーションを設置し、プライバシーの配慮に努めました。

そして、地域医療支援センター内は、地域医療連携課、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所を再配置とあわせて、連携医の先生方に利用いただくスペースを拡充しました。

より緊密な連携で、これからも取り組んでまいります。



福井赤十字病院

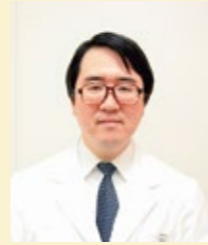
理念

人道・博愛の精神のもと、県民が求める優れた医療を行います。

基本方針

- 患者さんの権利と意思を尊重し、協働して医療を行います。
- 安全と質を向上させ、優しい医療を行います。
- 人間性豊かで専門性を兼ね備えた医療人を育成します。
- 急性期医療・疾病予防・災害時医療に積極的に取り組みます。
- 保健・医療・福祉と連携し、地域社会に貢献します。

痙性斜頸のボツリヌス毒素治療



神経内科部長
高野 誠一郎

痙性斜頸とは頸部の筋肉群の持続の長い収縮で起こる異常姿勢・運動です。〈図1〉の様な、姿勢・運動です。患者さん1人1人、特有の定型的な姿勢・運動を示します。中枢神経系の障害が原因です。原因疾患は様々ですが、よくわからない1次性が多いです。

さて、痙性斜頸の治療は、基本的に原疾患の治療になります。対症的な治療として、抗パーキンソン病薬のうち抗コリン薬があげられますが、効果は限定的です。(保険では認可されていません。)痙性斜頸にはボツリヌス菌の毒素を精製した、ボツリヌス毒素治療が有効で、保険診療でも認可されています。A型ボツリヌス毒素(商品名:ボトックス)、B型ボツリヌス毒素(商品名:ナーブブロック)が医薬品として発売されており、日本でも使用可能です。当院では双方とも使用しています。

実際の治療の説明をいたします。

患者さんの実際の姿勢・運動を、〈図2〉の様に要素的に分析します。〈図3〉などを参考に注射する筋肉と注射量を決めます。

頸部の筋肉は、〈図4〉の様に幾層にも重なり合い、複雑です。正確に目標とする筋肉に注射するため、①エコーガイド ②筋電図モニター ③アトラス参照、などの方法がとられます。当院では、筋電図モニター下で行っております。

治療効果は注射1~2週間で出現し、約3ヶ月持続します。治療効果は、異常運動の完全な消失、とまでは行かず、いくぶん軽くなり暮らしやすくなるくらい、と考えていただくのが良いと思います。しかしこの治療を繰り返していくうちに、少しずつ改善し治療を必要としなくなった患者さんもおられます。

ボトックスは1回100~240単位程度、ナーブブロックは1回2500~10000単位使用します。ボトックスとナーブブロックでは単位の基準が異なります。ボトックスは100単位と50単位の規格があり、それぞれ87536点、49231点です。ナーブブロックは2500単位の規格のみで29728点です。薬剤のみでも高価になります。患者さんは、3~6ヶ月に1回程度その高額な治療費を負担されることになります。

当院での痙性斜頸の治療患者数は北陸随一、とのこと。(製薬会社)

高野は日本ボツリヌス治療学会に代議員として所属し、なお一層、治療効果を高めるために努力しております。



図1



図2

図3

	同側回旋	対側回旋	側屈	肩挙上
胸鎖乳突筋		○	○	
頭板状筋	△		○	
頸半棘筋		○		
頭半棘筋	△			
僧帽筋上部		○	○	○
前斜角筋		○	○	
肩甲挙筋	○?		○	○

ジストニアとボツリヌス治療 改訂2版: 著作: 目崎・梶 監修: 木村洋 西暦2005年 診断と治療社 一部改変

図3

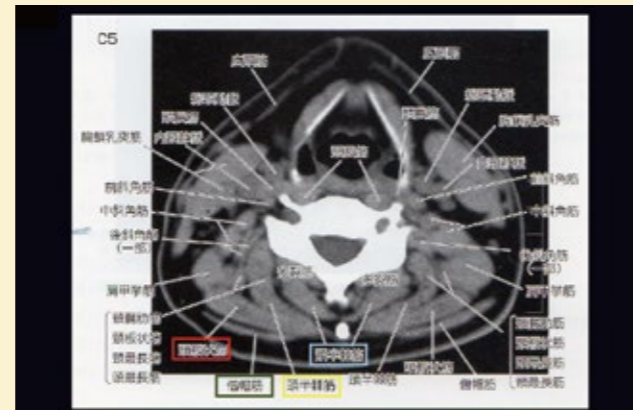


図4

「北米ER型」救急の導入について



第2循環器内科部長
(兼)第2救急部長
坪川 明義

4月から当院救急部に救急専門医を配置いたしました。平日の午前8時30分から午後5時までではありますが、救急外来で救急患者の診察を担当いたします。嶋田先生は、赴任前は福井大学救急部・総合診療部講師を務められ、所属学会は日本救急医学会、日本臨床救急医学会、日本プライマリケア連合学会、日本中毒学会、日本感染症学会、日本内科学会と、救急医療のスペシャリストです。救急専門医は、救急患者を診療科に関係なく横断的に診療し、重症の場合には救命救急処置、集中治療を行うことを専門としています。初期診断、治療の経過に応じて適切な診療科と連携して診療に当たりますので、今まで以上に迅速かつ的確な救急医療が可能になると考えられます。

今までの当院の救急外来では、救急専門医ではなく、内科系・外科系の救急担当医が救急患者さんに対応するシステムを取っており、内科系の救急担当医が循環器内科医の日もあれば消化器内科医の日もあり、外科

系の救急担当医が消化器外科の日もあれば整形外科医や耳鼻科医の日もある、といった形になっていました。残念ながら、日本では救急専門医の数が不足しており、この救急システムを採用している病院が最も多いのが現状です。しかし、ここ近年、この救急システムの問題点が多く指摘されるようになり、救急専門医が全ての救急患者の初期診療に対応する、いわゆる「北米ER型」救急が注目され全国的に徐々に普及してきました。当院でも、まずは平日だけではありますが、「北米ER型」救急を導入し、外傷患者のプリベンタブルデス(防ぎえた死)の予防、増加する複合的な疾患を有する高齢・救急患者への対応、必修化された卒後臨床研修での主目的であるプライマリケア~初期救急全般の教育などを充実させていきたいと思っております。

今後も、嶋田先生を中心にした救急部と各科専門医が協力して、救急患者の診療に取り組んでいきますので、よろしくお願いいたします。

